

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成25年4月24日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 地球環境学堂

職 名 学 堂 長

氏 名 藤 井 滋 穂

助成の種類	平成24年度 ・ 社会連携助成		
事業名	平成24年度 京都大学地球環境フォーラムおよび嶋臺塾の実施		
実施期間	平成24年7月14日 ～ 平成25年3月22日		
実施場所	京都大学時計台記念館百周年記念ホール、嶋 臺		
参加者	総数 679名	内訳	地球環境フォーラム 507名、嶋臺塾 172名
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(嶋臺塾記録等)		
会計報告	事業に要した経費総額		3,269,900円
	うち当財団からの助成額		2,800,000円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 京都大学運営費	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場借料	139,716	139,716
	印刷製本費	1,167,285	1,167,285
	謝金	473,800	473,800
	旅費	623,653	153,753
	通信運搬費	20,620	20,620
委託費	521,940	521,940	
消耗品費	322,886	322,886	
合 計	3,269,900	2,800,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団のご支援により、地球環境フォーラムおよび嶋臺塾を各3回開催し、京都大学の環境問題に関する研究成果を広く社会に伝え、また市民や外部の研究者との対話からフィードバックを得ることができました。今後も引き続きご支援を賜ります様、お願い申し上げます。		

成 果 の 概 要

京都大学大学院地球環境学堂長 藤井 滋穂

京都大学大学院地球環境学堂では、教育研究成果を学内外へ公開するとともに、今後の社会の有り方を市民と共に考え、教育研究活動にフィードバックさせるために、地球環境フォーラムおよび市中の町家を使つての嶋臺塾を開催している。地球環境フォーラムでは、大学内外の研究者からの話題提供の後一般の方も交えて広く議論する場としている。嶋臺塾は、京町家を会場として、「衣食住」など生活文化につながるテーマを設定し、本学教員と京の伝統文化を支える文化人による話題提供と、参加者全員による意見交換を行い、最新の地球環境学の成果の共有と、地球環境をめぐる社会連携へと展開するものである。

平成 24 年度は計 3 回地球環境フォーラムを開催した。第 13 回（本年度 1 回目）は、「リスクとつきあう」をメインテーマに、「環境問題の健康影響を測定する指標としてのリスク」、「飲み水の安全と安心」、「生態系リスクの観点から琵琶湖の自然再生事業を考える」、「リスク・コミュニケーション」について 4 名の講師が講演を行った。第 14 回（本年度 2 回目）は、地球環境学堂・学舎 10 周年記念行事の一環として、「地球環境学のめざすところ」をメインテーマに、尾池和夫 京都大学名誉教授より「地球環境の調和ある共存をめざして」、高月 紘 京都大学名誉教授より「パートナーシップによる取り組みへの期待」（講師：）と題して計 2 題の講演が行われた。第 15 回（本年度 3 回目）は、「森が壊れる」をメインテーマに「なぜ、これほど木が枯れるのか」、「ボルネオ熱帯降雨林における生物群集への伐採影響と持続的森林管理への途」、「人間の関与を失った森はどうなったのか」、「森の生態系を乱すもの—生物の侵入・絶滅と放射能の降臨」について 4 名の講師が講演を行った。各回とも講演後に、パネルディスカッションを行った。会場からも多数の質問・コメントが寄せられ活発な議論が行われた。

平成 24 年度の地球環境フォーラムには合計で 507 名の参加者があった。

嶋臺塾の平成 24 年度の活動としては、まず、平成 23 年度に行った 3 回の嶋臺塾の記録を編集し、500 部を印刷、約 400 部を配布した。続いて、「森」「虫」並びに「薨（いらか）」をテーマとした 3 回の嶋臺塾を開催し、延べ 172 名の参加者を得た。

初回（第 24 回）は、「森を看る」と題し、国内外の森の現状について生態学と華道の

視点から議論した。学堂の岡田准教授から、マレーシアの野菜やアブラヤシの栽培、さらにエビの養殖を通じて「熱帯の森を喰らう」我々の日常生活の業が語られた。対して、華道未生流笹岡の家元である笹岡隆甫氏からは、平等院鳳凰堂と生け花との競演といった華やかな映像が示され、そうした美しさは「足でいけよ」という華道の教えに基づいており、身近な京の里山に足を運び、その自然の姿に目を行き届かせることが大切であると説かれた。会場との質疑では、笹岡氏のハスの生け花を詠んだ五行詩が披露されるなど、和やかな一幕もあり、一方で、森と関わり方を見直すことの難しさについての厳しい見解も出された。しかしながら、まずは手をかざして自分の目でじっと見つめることが大切であるとの見解が会場全体で共有された。

第25回嶋臺塾は、「虫に聞く」と題し、虫と人との関係について考え、我々の食や生活のあり方を見つめ直すことを試みた。日本農薬（株）の濱口洋氏からは、いにしえの人と虫との関係、農薬の登場、レイチェル・カーソン『沈黙の春』の衝撃、現在そしてこれからの農薬など、農薬メーカーの立場からは言いにくいことも含め、多岐に亘った話題提供が行われた。工学研究科の梅田真郷教授からは、ショウジョウバエの体温の決定や制御に関わるタンパク質についての最新の研究成果や、そうした研究を通じて虫から教えられた知恵が紹介された。こうした話題提供と会場との質疑を通じ、虫との関わりを考え、虫に学ぶことが、我々の食や生活のあり方を考える上でいかに多くの視点と知見を与えるかが参加者の間で確認された。

第26回は、平成7年の阪神淡路大震災以来、瓦屋根や伝統的建築の耐震性が怪しまれている中で、千年以上に亘って日本の文化や日本人の原風景を形づくってきた価値が失われることの危うさについて、淡路瓦の瓦師・道上大輔氏と伝統的構法の耐震性の研究者・鈴木祥之教授の話を通じて考えた。道上氏からは、瓦製品や瓦のある風景などがスライドを使って紹介され、瓦の曲線や瓦屋根の風景が日本人の美意識の奥に眠っていることを、会場全体で体感させてもらった。鈴木教授からは、伝統的構法を未来につなぐことの大切さと技術的・制度的課題、これまでの成果について、巨大な瓦屋根をもつ東本願寺御影堂の耐震補強の様子なども交えて説明してもらった。会場からは、伝統的町家を支えてきた町衆や、町並みづくりの実践家など、多様な立場からの見解が出され、時代の波を越えたよき街並みづくりやその可能性について、議論は尽きなかった。